

出題分析			
試験時間	100分	配点	学部により異なる
		大問数	3題
分量（昨年比較）	〔減少 同程度 増加〕	難易度変化（昨年比較）	〔易化 同程度 難化〕
<p>【概評】</p> <p>〈現代文〉（問題一、問題三）</p> <p>問題一の分量については、漢字の書き取り問題数が1問増加したのに加え、制限字数が30字以内、40字以内、50字以内が各1問で昨年度より合計15字増加しているものの、本文量は昨年並み。80～100字程度の記述問題が出題されていた2018年度以前と比べ、解答に盛り込むべき要素を見極め簡潔にまとめる力を問う傾向が続いている。設問は傍線部問題で総合的な読解力を問うオーソドックスな出題。問題三は例年通り本文の内容を200字以内で要約する問題。本文量は増加。主題を読み取り、まとめる内容を吟味することが求められた。</p> <p>〈文語文〉（問題二）</p> <p>問題二は、明治期の政治論からの出題。本文量・記述量とも昨年とほぼ同等。抽象的な議論だが、論旨は明快なので、解答は必要事項を制限字数内にまとめる要約力の勝負となるだろう。設問は昨年と同じく全3問で、現代語訳・内容説明・理由説明の構成である点も同じ。</p>			

設問別講評			
問題	出題分野・テーマ	設問内容・解答のポイント	難易度
一	現代文（評論） 田中祐介「日記文化」を掘り下げ、歴史を照射する	本文は日記について考察した文章。自己の内面を偽りなく綴るべき行為とされながらも常に読者を意識するものであるために、社会的な規範を内面化してしまうという日記の性質について論じている。いずれの設問も解答すべき内容は読み取りやすい一方、字数制限がやや厳しく、解答を簡潔にまとめる力が要求された。問い二は日記において未来の自己を含む読者（他者）が意識されていること、問い三は規範が自己に内面化されるプロセス、問い四は内面化された規範意識と書くことへの欲望の葛藤をそれぞれまとめればよい。漢字の書き取り1問、内容説明2問、理由説明1問の構成。	標準
二	文語文（評論） 矢野文雄（龍溪） 『人権新説駁論』	『経国美談』などの政治小説で知られる矢野龍溪による文章。天賦人権論の立場から、対立する加藤弘之の説に反論する内容。問い二は字数内で「隠顕」との違いをどのように表現するか、工夫が求められる。問い三は「傾倒」という語の意味を誤解しないように。設問構成は現代語訳1問、内容説明1問、理由説明1問の構成。	標準

設問別講評			
三	現代文（評論） ※要約問題（200字） 佐藤卓己「ネガティブ・リテラシー」の時代へ」	本文は、SNS の普及した現代のメディアにおいて、「ネガティブ・リテラシー」を身につけることが求められていることを説いたもの。 従来のメディアリテラシー教育では、吟味思考のできる市民を育てることを目的としていたが、筆者はそれを楽観的だと言う。メディア環境が変化し、専門家ではない一般市民も情報発信の手段と責任を持つようになった現代においては、情報の真偽は簡単に見分けられるものではなくなった。そのような中で求められるのは、あいまいな情報に耐えて不用意な発信を控える「ネガティブ・リテラシー」である。以上の内容を制限字数内で説明したい。本文量は昨年年度より増加したが、まとめるべき内容は比較的つかみやすかったのではないと思われる。制限字数内で要約するにあたっては、本文の要点を読み取り、解答の構成を考える力が求められた。	標準

合格のための学習法
<p>〈現代文〉…問題一の特徴は簡潔に書く力が求められることである。特に、本文全体を踏まえて要旨を説明する問題が出題された場合には、解答に必要なポイントを選び分け、的確にまとめる力が必要である。したがって、現代文の記述問題を解くときには、常に簡潔さを意識してまとめるように心がけ、一橋大の過去問や他の国公立大学の入試問題を使って記述力を養っておく必要がある。問題三は、例年 200 字以内の要約問題であり、読み応えのある評論文が出題される場合がある。この形式は一橋大特有であり、相応のトレーニングを積んでおく必要がある。過去問はもちろんのこと、3000 字程度の文章を 200 字以内にまとめる練習を継続的に行いたい。</p> <p>〈古文・文語文〉…問題二は、基本的には本年のように近代（主に明治期）の文語文が用いられるが、数年に一度の割合で、古文単独の出題や、古典を論じた現代文による現古融合問題もある。文語文の場合、採用されるのは主として政治・文化論や時事評論であり、内容理解には日本近代史についての基礎知識が求められることがある。また古文・現古融合の場合も、評論のような論旨・主張の明確な文章が用いられ、主題の把握が問われることが多い。他大学での類例があまり見られないので、対策は難しいかもしれないが、過去問演習を重ねることで文体に慣れるとともに、出題の傾向を確実につかんで、設問の要求に応える記述力を養おう。</p>